# 日本の政治家父と子の肖像

俵孝太郎

中央公論社

橋本龍太郎　小沢一郎　加藤紘一　河野洋平　小泉純一郎　塚原俊平　田中真紀子　山口敏夫　江田五月　村山富市　船田元　加山紘元　寿元

112
023
139

# 日本の政治家父と子の肖像

俵孝太郎

中央公論社

俵孝太郎（たわら・こうたろう）
1930年東京生まれ。東京大学文学部倫理学科卒業。サンケイ新聞社会部記者、政治部記者、論説委員を経て、69年に独立。文化放送とフジテレビのニュースキャスター、臨時教育審議会専門委員、財政制度審議会委員などを歴任。著書に『我「朝日新聞」と戦えり』『新人類は会社を滅ぼす』『90年代政治の構造』『明日の日本を考える』『政治家の風景』など多数

日本の政治家　親と子の肖像

1997年4月10日初版印刷
1997年4月20日初版発行

著者――俵孝太郎
発行者――嶋中鵬二

印刷・製本――大日本印刷
発行所――中央公論社
〒104　東京都中央区京橋2-8-7
☎03-3563-1431（販売部）
☎03-3563-3666（編集部）
振替　00120-4-34
Printed in Japan　©1997
ISBN4-12-002666-3　C0031
定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

# 日本の政治家　父と子の肖像

目次

序　世紀末 日本政治の着地点　7

1　鳩山家四代百年のドラマ　61

2　船田元は大叔父に学べ　89

3　横路孝弘と〝革新の本流〟の蘇生　113

4　江田五月の〝市民〟と江田三郎の〝理論〟　141

5　〝隙間政治家〟山口敏夫の来歴　166

6　父思いの娘 田中真紀子の無念　187

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

7　塚原俊平と自民党新世代　211
8　小泉純一郎〝捨て身〟家系の三代目　235
9　父一郎を反面教師とした河野洋平　263
10　新保守の次代を担う加藤紘一　288
11　小沢一郎と〝四人の父〟　313
12　父龍伍に学んだ橋本龍太郎の真骨頂　351
あとがき　379

表紙絵　山田　紳
写　真　共同通信社
　　中央公論社写真部
装　幀　中央公論社デザイン室

# 日本の政治家　父と子の肖像

# 序　世紀末 日本政治の着地点

## 1

一九九六（平成八）年十月二十日に行われた、初の小選挙区・比例代表並立制による第四十一回総選挙は、九〇年代の声とともにはじまっていた日本政治の混迷状況に対して、一応の中間報告を出すことになった。

これはあくまで中間報告であって、まだ結論がはっきり出たというわけではない。政治の世界には予測不可能な要素も多く、今後発生し得るさまざまな状況によって、結論が中間報告の延長線上に現れてこないこともあり得る。しかし、今回の総選挙を経て、混迷の向こうに一本の道筋

が浮かび上がってくるようになったことも、否定できまい。

そこでまず、中間報告段階で示された事実を列挙しておかなければなるまいが、自民党はこの総選挙で、衆議院の総定数が五百十一から五百へと十一減ったにもかかわらず、前回一九九三（平成五）年の総選挙で得た二百二十三議席に比較して十六議席増、議員の死亡や異動があった結果の今回の解散時にくらべれば二十八議席増の、二百三十九議席を獲得して第一党の地位を保った。衆議院で単独過半数を制する二百五十一議席には十二議席及ばなかったが、二年前から連立関係にある社民党とさきがけに加えて、総選挙前後に新進党を離脱して保守系無所属となった議員の支持も取りつけ、衆参両院で橋本龍太郎総裁に対する首班指名を得た。そして、第二次橋本内閣を、社民・さきがけ両党が連立関係は維持したものの、今回は閣外協力に回ったために、一九九三年七月に宮沢内閣が退陣していらい、三年三か月ぶりの自民党単独内閣として発足させている。

とはいえ、社民・さきがけ両党が離反して野党に回った場合、内閣不信任案が出れば、党外の同調勢力を加えたとしても、衆議院本会議で確実に否決できる見通しが立っているとはいえない。そのうえ参議院は、一九九五（平成七）年の通常選挙で新進党の後塵を拝して伸び悩んだことが響いて、過半数を大きく下回っている状態であって、社民党の協力を得なければ、与野党対決法案の成立は望めない状態である。今後、ひところのように自民党から離脱する議員が続出する可能性はほぼなくなったと思われ、危機的状態から脱して小康状態を得たことははっきりしてきているが、かつてのような体力を回復するには、まだ時間が必要だといわざるを得まい。これが中



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

間報告の第一のポイントである。

これに対して、選挙中に小沢一郎党首が、自民党を凌ぐ第一党になって政局収拾の主役になると豪語していた新進党は、解散時にくらべて四議席減の百五十六議席にとどまり、野望達成にはほど遠い結果に終わった。選挙前から続発していた党所属議員の離脱はその後も散発的に続き、さらに選挙戦での事実上の敗北を契機として小沢党首と羽田孜元首相との対立が再燃し、羽田は離党して、同志十三人で太陽党という名の新党を旗揚げする始末である。

羽田は、こうすることで反自民・非共産勢力を再結集するための中核的役割を果たしたいとしているが、そう考えているのは羽田だけであって、太陽党の大勢は、自民党への復帰ないしは協力を意図しているといわれる。太陽党に先立って総選挙前後に新進党を離脱した議員によって、二十一世紀と名乗る小会派も生まれたし、細川護熙も、かつて率いていた旧日本新党グループとともに、新進党離脱の時期を模索しているといわれる。新進党は明らかに分解過程に入ったと見るほかなく、次期総選挙まで、たとえ痩せ細った姿になったとしても存在しているかどうかは、極めて疑わしい。これが中間報告の第二のポイントである。

総選挙直前に、社民党やさきがけに属していては戦えないと判断した議員が、鳩山由紀夫と菅直人の〝顔〟にすがって新しい〝風〟を起こして生き残ろうとして集まった民主党も、期待したほどの〝風〟は吹かず、解散時と同数の五十二議席しか得られなかった。労組の連合の中には、現に旧民社党系の民間大企業労組は新進党支持、官公労は従来通りの社民党支持派か民主党支持派というふうに、連合内部が与野党にわかれた三つの党にまたがる〝股裂き〟状態になっている

のを解消するために、新進党と協調して反自民の立場をとることを前提に、民主党支持に一本化しようと画策する動きがあるが、幹部が思っているほどには労組票は組織的に動かなくなっているし、まして小選挙区制のもとでは労組票だけでは力にならない。

民主党議員の中には、細川・羽田両内閣での経験から、新進党に対する拒否感情が根強く存在しており、自民党との提携を模索する議員も少なくない。連合が組織維持の思惑に駆られてアンチ自民・プロ新進の路線を強引に民主党に持ち込むような介入をすれば、党分裂の引き金を引くことにもなりかねず、民主党も、次期総選挙まで、発足時の姿で命脈をつないでいるかどうかは覚束ない。これが中間報告の第三のポイントである。

細川内閣では反自民連立に加わり、羽田内閣では連立を離脱、その後一転して自民・さきがけと連立を組んで政権を奪取し、村山内閣の首班を出した社民党は、前回一九九三年の総選挙ですでに前々回一九九〇（平成二）年に獲得した議席を半減させる七十議席に落ちていたが、その後極左派は新社会党をつくり、またかなりの議員が民主党に鞍替えしたために、解散時には、三十議席にまで減っていた。それが総選挙の結果、さらに半減の十五議席に終わるという惨敗を喫し、十一議席増の二十六議席に達した共産党にも水をあけられて、〝革新の盟主〟などとはとてもいっていられない位置に転落した。

同様の動きをしたさきがけも、前回の十三議席から、いったんは新進党からの落ちこぼれなどを吸収して議席をふやしていたが、中堅・若手が民主党に走り、九議席で解散を迎えた。総選挙が終わってみれば、獲得できたのは僅かに小選挙区の二議席だけ、比例代表では全敗する始末で、

もはや政党の体をなしているとはいえない姿になっている。

両党とも、第二次橋本内閣に対して、連立与党にはとどまるものの、閣外協力に立場を変えたが、党勢の立て直しは容易ではない。民主党とのからみの中で今後どのような展望を切り開くか、前途多難というほかない。これが中間報告の第四のポイントである。

もう一つ、創価学会―旧公明党ブロックについても触れておかなければなるまいが、一九六七（昭和四十二）年以降公明党として総選挙に登場していたこの勢力は、今回は新進党の構成メンバーとして選挙戦に臨んだ。前回公明党は五十二議席を得ていたが、今回は新進党の百五十六議席の中で、旧公明党系は三十九議席を得たにとどまり、大幅に勢力を後退させた。しかも、このうち二十八議席は比例代表名簿の上位に登載されて当選したもので、小選挙区では二十四人が立って十一勝十三敗と負け越している。

創価学会―公明党の選挙といえば、全員当選、あるいはごく少数が取りこぼすのが通例だったが、小選挙区制のもとでは、新進党を名乗って〝創価学会隠し〟をしたにもかかわらず、苦戦を免れなかった。創価学会の金城湯池とされる阪神間では完勝しているが、ここで得た六議席を除けば五勝十三敗、東京では一勝四敗であって、惨敗といっても過言でない成績である。自民党の反創価学会候補に対して、旧自民党系や旧民社党系の新進党候補や新人タレント候補を立て、創価学会が裏に回って全力投球した選挙区もいくつかあったが、ここでも成績は振るわなかった。

創価学会の支援がなければ新進党は全国規模の選挙は戦えないのであって、その組織力は決して軽視できないが、創価学会色が強烈に出ると、有権者の多数から反発されて、新進党自体を限

界政党化してしまうという、ジレンマが露呈されたといえる。この点は新進党にとっても深刻な問題だが、新進党に加わることで政権入りを策していた創価学会としても、思惑が大きく外れた格好になった。

こうしたことが影響したのか、一九九五年の参院選以前に当選していた参議院議員と、同年の統一地方選挙当選者を含む地方議員によって、創価学会直結の組織として温存されていた公明は、いずれ時機を見て新進党に加わるとしていた方針を軌道修正し、独自色を強める気配である。新進党内の創価学会議員が公明に合流して、旧公明党の姿に完全に戻ることになれば、新進党は立ち往生を免れないが、創価学会―旧公明党ブロックも、小選挙区・比例代表並立制のもとでは、かつて得ていた議席は到底回復できまい。これが中間報告の第五のポイントである。

すでに再三言及してきたことだが、今回の総選挙は、一九二八（昭和三）年いらい、敗戦直後のただ一回を例外として、七十年近くも続けられてきた中選挙区制を廃止し、小選挙区・比例代表並立制という新しいシステムのもとで行われた。この制度は、一つの選挙区に同じ党から複数の候補者が立って鎬を削る結果、選挙にカネがかかるうえに派閥政治が横行することになる状態を是正するとともに、少数の固い支持票さえあれば議席が得られる条件をなくして、あまり偏った勢力は議席を持てないようにし、幅広く国民の支持を集めることができるだけの幅を持った二大政党の間で政権が争われる道を開く、という触れ込みで、〝政治改革〟の眼目として導入された。ところが、中選挙区制最後の総選挙になった前回は劇的な政権交替が生じたのに、今回は自民党が復調したうえ、次期総選挙に向けて自民党の安定度はさらに増すことが予測できる反面、

自民党に対抗できる勢力が形成される展望はまったく立たないという、皮肉な形になってしまった。

自民党は、たしかに今回の総選挙では単独過半数に届かなかったが、三百の小選挙区では全体の五六パーセントを超える百六十九議席を取っている。二百の比例代表で三五パーセントの七十議席しか取れなかったのが響いたのだが、行政改革に歩調を揃えた国会のスリム化で、比例代表部分が削減されることにでもなれば、他党が分散化傾向を強めていることもあって、ますます有利になる。鳩山内閣や田中内閣が果たせなかった小選挙区制の導入を、当時強硬に反対して潰した社公民勢力が、田中角栄直系の小沢一郎の仕掛けにはまって推進役を務めたために実現させてしまったわけで、これも皮肉な巡り合わせである。

衆参両院でかつてのように自民党が単独過半数を制するのは、参議院では少なくとも次回の一九九八年の通常選挙までは無理だし、あるいはその選挙でも困難かもしれない。現時点では中間報告以上のことにはならないという理由は、政界の流動化がおさまっていないことに加えて、この点にもあるわけだが、衆議院に限っていえば、現に自民党に近づいている二十一世紀に加えて、新進党・民主党・太陽党などから、次期総選挙の当選を確保しようとして自民党入りを望んだり、自民党との協力関係を明確にしようとする議員が出てきて、実質的に過半数を制することになる確率は、決して低いとはいえない。仮にそうなれば、次期総選挙は大幅に延びて、任期満了の二〇〇〇年秋か、それに近い二〇〇〇年の予算成立後になる公算がある。この場合、野党暮らしに慣れている旧社公民出身議員はともかく、反自民の隊列に加わることが政権の一角にとどまる道

だと考えて自民党を離れた議員は、冷や飯を食い続けることに到底耐え切れまい。そうなると自民党は、次期総選挙までには、さらに力をつけることになる。

## 2

中間報告の段階をまだ出てはいないにしても、〝世紀末政局〟の混迷の向こうに一本の道が浮かび上がってくるようになった、というふうに考えるゆえんだが、こうなるとあの〝政治改革〟の騒ぎはいったいなんだったのか、ということになる。それとともに、細川内閣が一時的にせよ七〇パーセントというべらぼうな支持率を得たのはなぜだったのか、新進党が自分たちでなければできないと主張した〝改革〟とはどんなものだったのか、それがどうやら挫折しそうなことが日本の将来にとってどう影響するのか、といった疑問も改めて論じられなければなるまい。

ところが、そうした論議が行われている気配はさっぱりない。〝政治改革〟の大合唱が一種の躁の発作だったとすれば、今は鬱の発作に見舞われて自民党の復調を横目で見て舌打ちしているのが、テレビ・新聞など大マスコミの反応である。自分のアタマでものを考える習慣などとっくになくしてしまい、ニュースとお笑い番組の区別も怪しくなったテレビを漫然と眺めている大方の国民は、そんなもんかなと半信半疑の気分ながら、反自民と政治不信のメッセージだけはしっかり意識下に刷り込まれている状態にある。ものを考えないことでは大差ないレベルの大方の財界人は、新進党の主張する〝改革〟が進めば弱肉強食が可能になって、バブルの痛手から抜け出



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com